教育委員会だより

令和６年５月 23 日号 多治見市教育委員会 教育総務課

＜めざす子ども像＞
お互いを尊重し、主体的に学び、挑戦する多治見の子

子供の“居場所” ～トライサポーター配置～

現在の多治見市の不登校児童生徒数は“高止まり”の傾向となっています。その数約 130 名（４月の長欠報告で、７日以上の欠席者）。多くの子供たちが様々な理由や事情を抱え、なかなか学校や教室に足が向かない現状があります。

教育委員会では、本年度から不登校・不適応対策の新たな一手として『トライサポーター』を２名（小中各１校）配置しました。トライサポーターは、文部科学省が令和５年３月に発表した不登校総合対策『COCOLO プラン』で設置促進が求められている校内教育支援センターで子供の支援に当たります。ここでは、配置から間もなく２カ月となるトライサポーターの“トライ”を紹介します。

配置の中学校では、校内教育支援センターを『ほほえみルーム（HHR）』と名付けました。利用者は、現在 10 名程度。従来から配置しているほほえみ相談員との協働により、生徒の登校から下校までの生活をカバーしています。利用生徒は、まず職員室へ登校したこと知らせ HHR にやってきます。そして、ホワイトボードを使って一日の予定を立てます（自己決定の場）。ホワイトボードを撮影し、ロイロノートで提出することで、関係の教職員が生徒の動きを共有します。その後、リモートで授業を視聴したり、自分で決めた学習に取り組んだり、読書や描画、折り紙やパズルなどでホッと一息ついたりして過ごします。教室で授業に参加し、給食・昼休み・掃除時間をルームで過ごす生徒もおり、利用の仕方は様々です。

新年度のスタートを機に自分を変えようと前向きな姿勢になっている生徒がいます（教室で過ごす時間の増加、欠席日数の減少）。昨年度ほとんど学校に来ることができなかった生徒が、保護者と HHR の見学に来てくれました。HHR 内での関わりが増えてきたと言ってくれた生徒がいます。学び直しに意欲を見せる３年生の生徒もいます。HHR は、生徒の確かな“居場所”として動き始めました。今後、保護者との協力やさわらび学級等との連携も視野に入れ、その役割に大きな期待が膨らみます。この２カ月の手応えが、いつか確かな成果（子供の自立）に結実していくよう取り組んでいきます。

タイプは違えど… ～小中一貫教育基本方針～

令和８年４月開校をめざす笠原小中学校。多治見市初、県内で８校目（現時点）の義務教育学校開校に向け、ソフト面・ハード面の準備が本格化しています。笠原地域におけるこれまでの幼保小中一貫教育の歩みを踏まえた笠原小中学校が、本市の小中一貫教育のフラッグシップとなることは間違いありません。

一方で、小中一貫教育については全市的に推進していくものと考えています。令和４年度末までに案を取りまとめた『多治見市小中一貫教育基本方針』を昨年度精査し、この度、改めて基本方針として打ち出しました。その中では、一貫教育の形態や枠組みについても述べています。小中一貫教育は「施設分離型」と「施設隣接型」に、義務教育学校は「施設一体型」と位置づけ、中学校区の特性（関係小学校からの就学状況など）に応じて４つのタイプに分類しています。いずれのタイプにせよ、各学校はこの基本方針を踏まえ、中学校区単位の『小中一貫教育推進プラン』に基づいて特色ある教育活動を展開していきます。

副教育長のひとりごと ～国際交流派遣学生選考会～

コロナ禍で長らく中断していたアメリカのインディアナ州・テラホート市との交流事業が再開します（主催：多治見国際交流協会、事務局：文化スポーツ課）。先日、派遣学生選考会でのお役目をいただいたので出かけました。応募者は、中２から高２までの男女 22 名。面接と作文によって審査を行いました。私は、作文の評価を担当しました。原稿用紙２枚とはいえ、２時間で 22 名分の作文を読むというのは、久しぶりの経験でした。どの作文にも一様に応募動機や現地でやってみたいことなどが“熱く”述べられていました。「甲乙付け難い」とはこのことです。

どの生徒も目的意識や将来への夢なども明確に描いており、誰が派遣されるにしても、きっとひとまわり成長して多治見に戻ってきてくれることでしょう。

私が 20 代の頃、勤務する中学校に ALT としてテラホートから来ていた若者がいました。昔？の受験英語しか学んでいなかった私ですが、空き時間などにはコミュニケーションを取ろうと試みたものです。鮮烈な記憶として残っているのは、ある先輩教師が「No problem.」の意味だと言って、東濃弁の「あんじゃない。」を若者に覚えさせようとしていたことでしょうか…。